

平成 30 年度 東京都内湾水生生物調査 8 月稚魚調査 速報

●実施状況

平成 30 年 8 月 27 日に稚魚調査を実施した。天気は晴で、気温 31.6～33.9℃、調査地点の風は弱く、海は静穏であった。調査当日は大潮で、干潮が 11 時 38 分、満潮が 18 時 02 分であった(東京都港湾局のデータ)。

7 月 12 日に実施した稚魚調査で多くの個体が確認されたスズキ、マハゼは、今回の調査ではほとんど採取されず、成長とともに深所に移動したのと考えられる。

これらに代わって、夏季に干潟域に出現するシロギスやヒイラギ等が確認された。

2018/8/27	城南大橋	お台場海浜公園	葛西人工渚
作業時刻	11:10-12:20	9:45-10:40	13:14-14:55
水温(℃)	31.5	29.3	32.9
塩分(-)	18.1	20.5	10.3
透視度(cm)	14	22	21
DO(mg/L)	11.5	9.2	7.9
DO飽和度(%)	172.3	135.2	116.6
波浪(m)	0.1	0.1	0.1
pH(-)	8.3	8.3	8.1
水の臭気	下水臭(弱)	無臭	無臭
備考	下げ潮時から最干時に調査を行った。	下げ潮時に調査を行った。気温が高いためか、公園の渚を利用する観光客は少なめであった(10名程度)。	上げ潮時に調査を行った。干潟上では、ウミネコやカワウが休息していた。

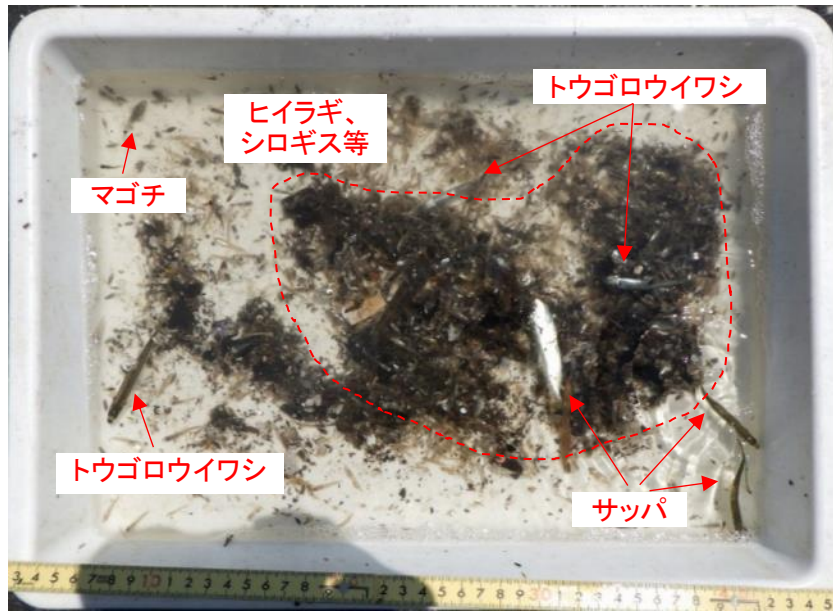
●主な出現種等 (速報のため、種名などは未確定)

主な出現種等	城南大橋	お台場海浜公園	葛西人工渚
魚種 (多い順 ^注)	ヒイラギ(m)	シロギス(c)	ヒイラギ(r)
	シロギス(m)	マハゼ(r)	シロギス(r)
	マゴチ(c)	ヨウジウオ(r)	カライワシ(r)
	サツパ(r)	マゴチ(r)	マゴチ(r)
	トウゴロウイワシ(r)	ギマ(r)	コショウダイ(r)
魚類以外	エビジャコ属(c) シオフキガイ(c)	ユビナガホンヤドカリ(r)	シラタエビ(+) エビジャコ属(+)
備考	他にマハゼ、ホトギスガイが採取された。	他にスズキ、タイワンメナダ属が採取された。	他にメナダ属、シマイサキ、ナベカ属、タイワンガザミ、タカノケフサイソガニが採取された。

注) 表中の () 内の記号は大まかな個体数を表す。

G:1000 個体以上、m:100~1000 個体未満、c:20~100 個体未満、+:5~20 個体未満、r:5 個体未満

城南大橋 採取試料



調査地点の様子



調査の様子

城南大橋西詰めにある干潟。北側には東京港野鳥公園がある。

●主な出現種等

※写真のスケール 1 目盛:1mm



東京湾では内湾を中心に湾全域に生息する。産卵期は主に夏季。日本各地で食用にされており、瀬戸内地方では「ままかり」(隣に飯(ま)を借りに行くほどうまい)と呼ばれている。



東京湾では、湾奥から外湾にかけての沿岸で普通にみられる。産卵期は夏で、夏から秋にかけて仔魚が東京湾全域に出現する。イワシという名前がつくが、イワシの仲間(ニシン科)ではなく、ボラに近い仲間。



内湾や河口域の水深 30m 以浅の砂泥底に生息する。産卵期は4~7 月で、採取された個体には大きさに違いがみられたが、全て今年生まれたもの。成長するにつれて、徐々に深場へと移動する。



東京湾では、湾奥から外湾にかけての砂浜海岸などで多くみられる。稚魚は動物プランクトンやアミ類を食べて成長する。警戒心が強く、危険を感じると砂に潜る習性がある。刺し身、天ぷらなどにして美味。産卵期は5~10 月。

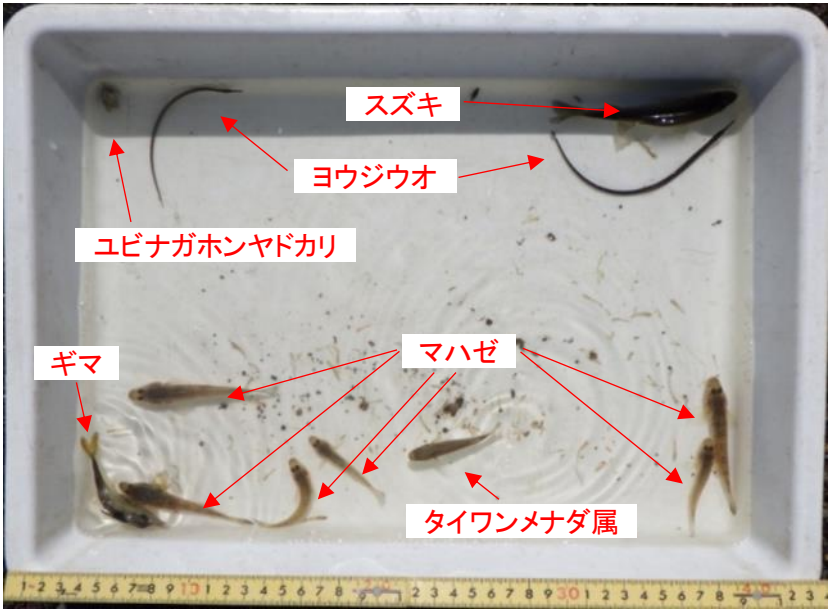


東京湾では、湾全域の干潟域や砂浜海岸、漁港などで普通にみられる。干潟域には、体長 6~7mm ほどの稚魚が 6~8 月にかけて来遊し、動物プランクトンを食べながら成長する。関東では流通していないが、関西以西では好んで食される。



内湾の砂泥底に生息し、普段はごく浅く潜って隠れている。環境の変化に敏感に反応し、体色を変化させる。魚類の稚魚などを捕食することが知られている。

お台場海浜公園 採取試料



調査地点の様子



調査の様子

水際数メートルで急に深くなる人工の渚。レインボーブリッジのたもとにある。

●主な出現種等

※写真のスケール 1 目盛:1mm



スズキ

東京湾を代表する魚のひとつ。ハゼ科稚魚や甲殻類を食べて急速に成長し、1年で20cm程度になる。成長に伴いセイゴ、フッコ、スズキと呼ばれる出世魚。渚で生活していたほとんどの個体は深所に移動した。



ギマ

1995年頃から東京湾で確認されることが多くなった。干潟域などの浅所で、夏から秋にかけて全長1~5cm程度の幼魚が出現する。採取された個体はそれよりもやや大型。カワハギに近い仲間で、味もカワハギに近い。



マハゼ

東京湾を代表する魚のひとつ。稚魚は、初夏から秋にかけてゴカイや甲殻類を食べて成長し、徐々に深所へと移動する。7月に比べ個体数は少なかった。



タイワンメナダ属

主に琉球列島以南に分布するが、幼魚は夏に東京湾でもみられる。東京湾ではナンヨウボラの採取例があり、採取された個体はナンヨウボラの可能性が高い。ボラにある胸鰭上方の青色斑がない。



ヨウジウオ

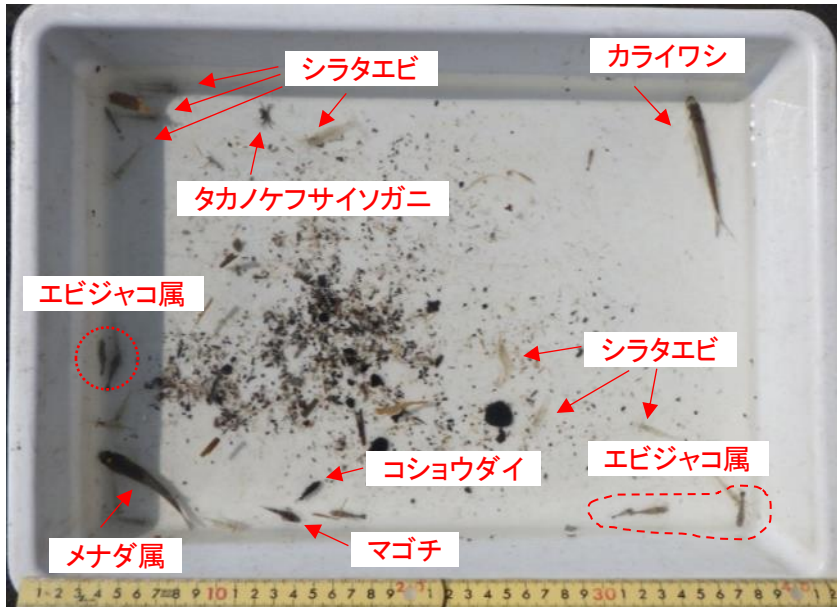
ヨウジウオ科魚類では、東京湾で最も普通にみられる種。湾奥から外湾にかけてのアマモ場で多くみられる。全長30cm程度になるが、本調査では10cmを越える大きな個体が採れることはまれ。



ユビナガホンヤドカリ

東京湾の干潟では、普通にみられるヤドカリである。潮間帯から浅海域にかけて生息する。『海の掃除屋』としての役割も果たしている。「宿」にしていたアラムシロガイの貝殻にはアメリカフジツボが付着していた。

葛西人工渚(東なぎさ) 採取試料



調査地点の様子



調査の様子

東京湾奥にある広大な人工干潟。一般の立ち入りが禁止されており、野鳥の楽園となっている。

●主な出現種等

※写真のスケール 1目盛:1mm



カライワシ

東京湾では内湾の干潟域や外湾の砂浜海岸で体長 3cm 程度の仔魚(レプトケファルス幼生)が7~9月にみられることが多い。今回採取されたのは体長 8cm 程度の幼魚で、成長すると体長 75cm 程度になる。小骨が多く、食用には向かない。



コショウダイ

湾奥から外湾にかけての干潟域などの浅所で、夏から秋に体長 3~10cm 程度の幼魚がみられる。尾鰭以外は褐色で、枯れ葉に擬態していると考えられる。成長に伴い体色が変化し、成魚は全体に黒色の斑紋が散らばったようになる。



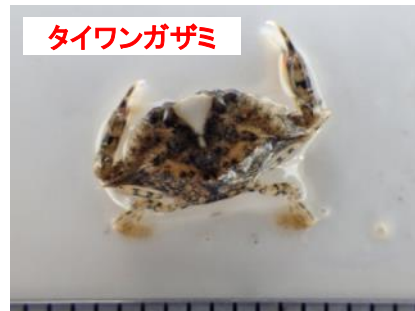
ナベカ属

河口付近や沿岸の岩礁域に生息する。産卵期は5~7月で、ふ化した仔魚は湾全体に分散する。採取されたものは着底後間もない稚魚で、まだ色素が薄い。東京湾におけるナベカ属は、ナベカ、イダテンギンポ、トサカギンポ等が知られる。



シマイサキ

湾奥から外湾にかけての沿岸浅所で普通にみられる。産卵期は 5~8 月。夏季以降、体長 8mm~数 cm 程度の稚魚が沿岸浅所に夏季に出現する。口から尾に向かう縞模様特徴的。



タイワンガザミ

浅海の砂や砂泥底に生息する。甲幅 15cm 程度まで成長する。成熟した個体では、雌雄で体の模様が異なり、雄は脚が美しい青紫色になる。雌は全体的に暗緑色。ガザミと同様に食用となる。



シラタエビ

額角

スジエビ類よりも大型で、体長 7cm 程になる。汽水域に生息しており、触角が青いことで他種と簡単に見分けられる。額角(がつかく:頭の上面のトゲ)がトサカ状に盛り上がる。かき揚げで美味。